福音ルーテル釧路教会の終焉と釧路市内のキリスト教会

持田　誠（浦幌町立博物館学芸員）
岡田　薫（日本福音ルーテル帯広教会牧師）

キリスト教における教派とルター派

2017年は、「マルティン・ルターの宗教改革」から500年にあたる年だった。ローマ・カトリック教会の腐敗に、強い疑念を抱いたドイツの修道士マルティン・ルターは、1517年10月31日、ヴィッテンヴェルク城教会の扉へ「95箇条の提題」と呼ばれる事実上の抗議文を貼り出した（と言われているが、実際に扉に貼ったのかは不明）。これが今日、世界史で言われる「宗教改革」の始まりで、やがて、カトリックを破門されたルターの後に続く人が続出。次々と新しい教会を設立した彼らは「プロテスタント（抗議する者）」と呼ばれ、やがて世界中に広まっていくのである。仏教のお寺に「宗派」があるように、キリスト教会にも多くの「教派」が存在するのは、ルターの宗教改革にひとつの大きな起源がある。

プロテスタント各派の元祖ともいうべき、ルターの教えを直接受け継いでいる教派を「ルター派」と呼ぶ。そのルター派の教会が2018年の秋、釧路の地から姿を消した。日本福音ルーテル釧路教会（図1，2）の撤退である。2019年には十勝の池田町からも撤退する方向で、道東のルター派キリスト教会は、帯広に集約されることになる。

いま、釧路市中心部からキリスト教会が静かに姿を消しつつある。神社・寺院と共に、釧路における人々の暮らしの精神的支柱として存在し続けたキリスト教会の盛衰を記録しておく事は、地方史の一断面として非常に重要である。そこで本稿では、2018年に釧路から撤退した、日本福音ルーテル釧路教会の歴史について概説する。

釧路におけるキリスト教会

ルター派の釧路宣教は、1966年に始まる。これは、1886年にW.アンデレス宣教師の釧路派遣により始まった聖公会（現在の釧路聖パウロ教会：釧路市弥生２丁目）や、当時根室に拠点があり、1898年に釧路へ伝教者を置いた東方正教会（現在の釧路ハリストス正教会：釧路市富士見２丁目）、1906年に釧路伝道を開始した会衆派（現在の日本基督教団釧路教会：釧路市浦見２丁目）など、明治期に釧路宣教を果たしている主要教派と比較すると、きわめて遅い。

一方で、日本基督教団春採教会（会衆派、釧路市武佐２丁目）が1956年、バプテスト派が1958年（日本バプテスト連盟釧路キリスト教会：釧路市若竹町）、改革・長老派（現在の日本キリスト教会釧路教会：釧路市柳町）が1962年、メノナイト（現在の日本メノナイト鳥取キリスト教会：鳥取大通６丁目）が1969年に設立されている。明治期に設立した聖公会などを釧路におけるキリスト教宣教の第１期とすると、ルター派の伝道が行われた時代は、第２期の波が来ていた頃と言えるだろう。

背景には、高度経済成長期に入り、釧路市においても工業・鉱業が著しく伸長して、都市の近代化と膨張が急ピッチで進んでいた事が挙げられる。戦後、復興してきたキリスト教会各派にとって、都市の膨張は宣教拡大の大きな好機となった事が推察される。

釧路教会の設立

当時、日本のルター派は、フィンランド系など、海外ミッションを母体とする複数の系列にわかれていた諸教会を合同しての教団体制再建の時期にあった。1965年から２年間にわたる教団挙げての「大伝道」が計画され、移民を対象とするブラジル伝道を開始すると共に、北海道も強化対象となる。「全国レベル開拓伝道」の旗印のもと「北海道伝道強化計画」が立てられ、釧路市が対象となった。

1964年当時、北海道には札幌教会のほか、函館・札幌北・池田に伝道所が置かれていた。1965年にハウスクネヒト宣教師夫妻が派遣されて帯広に居住。池田伝道所を手伝いながら、釧路での宣教拠

点の探索を開始した。

次いで1966年には岩崎修牧師夫妻が釧路市中島町14-１に居住。この年、岩崎牧師の住宅にて礼拝が執り行われるようになると共に、釧路市柳町７-22に宣教師館が建築された。道東初のルター派教会である「日本福音ルーテル釧路教会」（以下、「釧路教会」と記す）の始まりはここにある。

当時、ハウスクネヒト宣教師は、地域に溶け込むために釧路警察署で柔道を習い、積極的に伝道に励んだという。また、本州等の教会出身者で道東在住者の住所を調べ、訪ね歩いたりした。

また、岩崎牧師は後に農協会館で集会を開いていたとの証言がある。

1972年９月３日、駒場通り沿いの釧路市若竹町15-12に、念願の会堂が建築される。前年から柳町の宣教師館に居住した谷口博章牧師が、真新しい会堂における牧会を開始した。

キリスト教会では、新たに会堂を建設した際、その会堂を神に捧げ、神の御心に適うように用いて欲しいと祈る「献堂式」が挙行される。９月３日の献堂式の様子は、釧路新聞でも報じられた（図３）。

地方伝道と兼牧や寒さでの苦労

谷口牧師に代わり、1976年に釧路教会へ着任したのが合田俊二牧師であった。合田牧師は家庭集会を重視され、阿寒町内へ出向いての集会に取り組んだ。また、美幌・北見の教会員の自宅へも、足繁く通っていたという。

合田牧師に誘われ、学生時代に釧路教会を手伝いに来ていた中島康文牧師は、次のように回想している。

「手伝いに来ていた頃は、教会近くの食堂で毎日親子丼ばかりご馳走になった。北見での家庭集会の帰りは夜中になり、毎回、阿寒のスナックでラーメンを食べて帰った」。

地方伝道に情熱を傾けた合田牧師は、1980年に体調を壊されて入院、そのまま逝去される。その後、中島牧師は1987年の帯広教会専任を経て、釧路教会の専従牧師が不在となった1995年より兼牧を行っている。

「当時は毎月帯広で３回、釧路で１回礼拝を司式していた。牧師が赴けないときは、教会員が大半の司式をおこない、説教はカセットテープに録音して、帯広から釧路へ速達で送った。ところが、この速達が間違って鹿児島の教会へ送られてしまうことがあり、非常に困った」という。

また、会堂の寒さについて、近年まで帯広教会と釧路教会を兼牧していた加納寛之牧師は「聖餐式の葡萄液が、礼拝の最中に凍ってしまったことがある」と述回している。

釧路と阿寒で夜２回の礼拝

会堂が設けられた1972年当時の釧路教会の会員数は、17名と記録されている。かつて釧路教会で牧会した山之内正俊牧師は、以下のように当時を

図1. 日本福音ルーテル釧路教会

図2. 釧路教会の内部。2階に礼拝室があった

回想している。

山之内牧師は、①1986年４月～91年３月と、②1998年４月～2005年３月の、これまで２回、釧路教会を牧会している。このうち、①の時期の最初の１年間は、帯広教会との兼牧（複数の教会の牧会を兼ねること）であった。

当時、日曜礼拝出席者は、平均６人ほどだった。山之内牧師は、「開拓伝道５年で、礼拝出席者４～５人では教会は閉鎖だ。一年間の兼牧の間に、釧路の人達に教会を閉めると説得しろと〔教区長から〕言われた」という。

山之内牧師は「私も毎週帯広から通いますので、皆さんも礼拝に毎週必ず出席するよう約束して下さい」と提案する。しかし、釧路教会の教会員は、釧路市街地在住者のほか、阿寒町方面の酪農家にも存在した。

兼牧のため、釧路での日曜礼拝は日中には行えず、夜間になる。しかし、礼拝開始時刻が19時では、酪農家はまだ搾乳の最中である。一方、20時では「いったん着た寝間着をまた着替えなくてはならない」と市街地の教会員から不満が出る。

そこで、釧路市街地での礼拝とは別に、22時から阿寒町でも礼拝をすることにした。すると８人中５人は礼拝無欠席となった。これが評価されて釧路教会閉鎖の話は無くなり、やがて専任牧師が置かれることになって、山之内牧師は釧路へ着任したという。

教会員の生活状況にあわせ、夜礼拝を２回、しかも22時から実施していた事例はきわめて珍しい。酪農家の生活に合わせた礼拝時刻の設定も、釧路地方独特の事情から生まれたものであり、北海道キリスト教会史の上で特筆すべき点であると言える。

肉体的・精神的にも大きな苦難のときだったと推察されるが、山之内牧師は「いままでの牧会で一番充実していたときだった」と回想している。

感謝礼拝そして最終礼拝へ

『日本福音ルーテル教会百年史』は、北海道での伝道の困難さについて、「広大な大地に点在する宣教拠点」という問題点を指摘し、釧路宣教拡大の試みが、釧路市自体の衰退もあって、早期に挫折したと記述している。

2000年代後半に入ると、再び釧路教会には専任牧師が置かれなくなった。道東最初のルター派教会として、1956年に設置された池田教会も、教勢の退潮に歯止めがかからず、道東３教会の兼牧という状態が続いた。

末期は、土曜日が釧路教会の礼拝、日曜日午前が帯広教会、月数回は日曜日午後に池田教会、日曜日夜は再び帯広で夕礼拝というサイクルが定着した。牧師の負担が非常に大きいばかりでなく、３ヶ所の施設維持は、教会財政にとって大きな負担となっていた。

こうして、道東３教会の再編が本格的に議論されることとなり、2018年に釧路教会、2019年には

福音ルーテル教会で献堂式

日本福音ルーテル教会釧路教会（谷口博章牧師）が完成、その献堂式が三日午後三時から行なわれた。この献堂式は茂見止一北海道地区長の司式によって行なわれ、修了後、ディズニーファミリーバンド入賞の「コイル・ルテイオ」とそのファミリーバンド」によるフォークの夕べが開かれ、黒人霊歌などを楽しんだ。

若竹町に完成した同教会は、木造二階建て、延べ面積二百二十六・八平方メートルで、三角形の屋根を持った特徴的な建て物で、同教会では、伝道にあたる一方、親のいない不幸な子どもたちを集め保育する考えだ。

若竹町に完成したルーテル釧路教会と谷口牧師

れ記念品を贈り、誕生を祝った。

づくりを行ない、実施することになったが、当日は、会員全員が参加、十六日釧路をたつ。

図3．釧路教会の献堂式を報じる釧路新聞（1972年9月6日付8面）

池田教会を閉鎖して、道東地区は帯広教会へ統合する方針が決定された。

2018年の９月22日、ゆかりの深い牧師や信徒が集まり、「釧路礼拝堂感謝礼拝」が挙行された（図４）。先述の山之内牧師や中島牧師の回想の多くは、このとき証言されたものである。参加者には記念品として、教会敷地に敷かれていた十勝石が配られた（図５）。

ついで、教会暦で年間最終主日（１年の終わり）にあたる2018年11月24日に、釧路教会での最後の礼拝が執り行われた。加納牧師の後を引き継いで、道東３教会を兼牧する岡田薫牧師が、釧路教会最後の牧師となった。この日は、研修中の森下真帆神学生も司式に加わり、粛々と礼拝を終えた（図７）。昼食会後、ただちに教会内の片付けが始まり、現在も会堂の解体・用地売却に向けた内部整理が進められている。

衰退する中心街の伝統教派

図６は、釧路市中心部における、2019年１月現在のキリスト教会の分布である。釧路教会と同じ駒場通り沿いの新川町には、カトリック新川教会があった。しかし、教勢の衰退と司祭職の減少から、新川教会は黒金町の釧路教会に統合。現在、聖堂（礼拝堂）は「新川集会所」と名称を変え、夏季のみ月１回、地域住民のために夜間ミサが行われている。

また、共栄大通６丁目には、救世軍釧路小隊がある。救世軍は、イギリスに万国本営を置くメソジスト系のプロテスタント教会で、北海道連隊には函館、札幌、遠軽、帯広、釧路の５小隊が置かれているが、近年、釧路小隊は事実上、帯広小隊に統合された状態で、釧路独自の活動はほぼ無い。

釧路のキリスト教会史の上で第２期に分類される教会は、駅北部と柳町公園に挟まれた中心市街地に会堂を置くケースが多かったが、近年、この地区の衰退が激しいことがわかる。一方、第１期に釧路へ入った教会の多くは、弥生町、富士見町、浦見町などに現在も会堂を構え、教勢の衰退はありつつも、健在である点は興味深い。

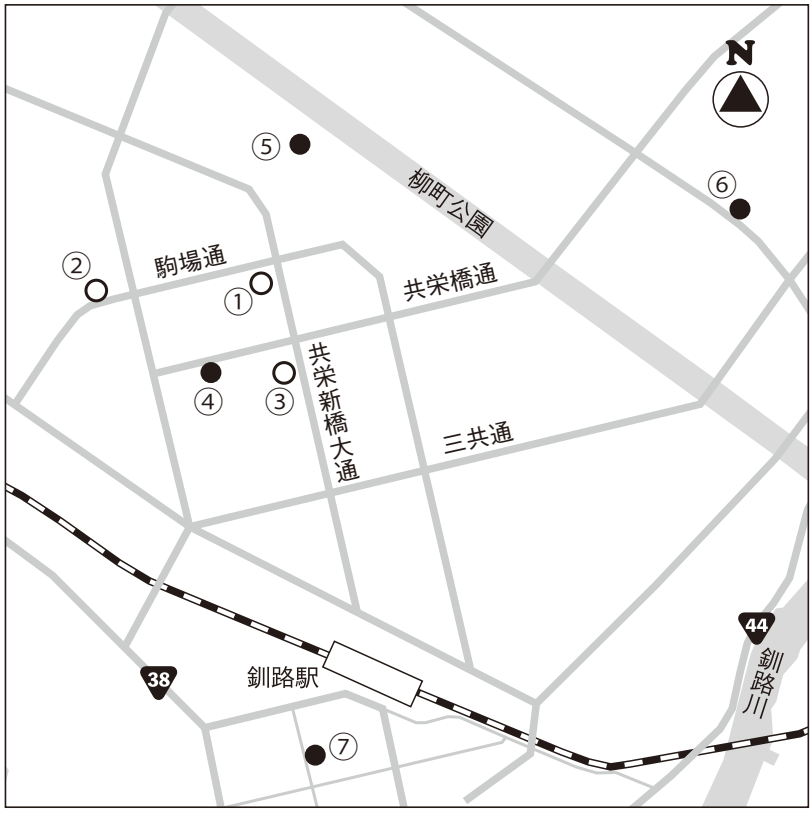
一方、現在もっとも教勢が伸長傾向にあるのは、ルター派、聖公会といった、宗教改革に起源を持つ伝統教派ではなく、これらの教派に属さない単立の教会である。音楽伝道やインターネット宣教など、従来の教会には無い方法で活発に活動し、教会員の拡大に成功している。同時に、教会の所在地も郊外に位置する傾向が強い（図７の⑥、釧路のぞみキリスト教会など）。郊外型の単立教会の設立は、釧路のキリスト教会史における第３期と言って良いのかも知れない。

ルターの宗教改革から500年、いま釧路のキリスト教会は静かに姿を変えつつある。十勝・根室も含めた道東のキリスト教会の盛衰については、今後、地方史の観点から、博物館としても、資料の収集や証言の記録化に努めていく必要があるだろう（図８）。

図4．釧路礼拝堂感謝礼拝での食事会の様子（2018年9月22日）

図5．感謝礼拝の次第と配付された記念品（十勝石）

【参考文献】
福島恒雄, 1982．北海道キリスト教史．日本基督教団出版局，東京.
日本福音ルーテル釧路教会伝道40年記念誌編集委員, 2006．日本福音ルーテル釧路教会伝道40年記念：1966～2006．日本福音ルーテル釧路教会，釧路.
徳善義和（編）, 2004．日本福音ルーテル教会百年史．日本福音ルーテル教会，東京.



○：近年に釧路以外の地域の教会へ統合もしくは事実上統合された状態にある教会
①日本福音ルーテル釧路教会［プロテスタント、ルター派］（2018年11月に帯広教会と統合）
②カトリック釧路新川教会［カトリック］（2015年に釧路教会と統合。現在は新川集会所として夏季のみ夜間ミサを実施）
③救世軍釧路小隊［プロテスタント、救世軍］（現在は事実上帯広小隊に統合）

●：現在も活動中の教会
④：日本バプテスト連盟釧路キリスト教会［プロテスタント、バプテスト派］
⑤：日本キリスト教会釧路教会［プロテスタント、改革・長老派］
⑥：釧路のぞみキリスト教会［プロテスタント、単立］
⑦：カトリック釧路教会［カトリック］

図6．釧路市中心部におけるキリスト教会分布図

図7．釧路教会の最終礼拝（2018年11月24日）

図8．最終礼拝の週報ほか釧路教会に関する資料。現在、収集・整理作業を実施している